

【小・中・高等学校・大学等の部】 優秀賞

ひとりだけの卒業式

大分県立芸術文化短期大学 1年 三浦 楓

これは少しだけ昔のこと、僕の心に残り、忘れられない思い出だ。

高2の秋、僕は体調を崩して学校を休みがちになっていた。とまらない頭痛、夜はほとんど眠れない。

頭痛と不眠に悩まされ続けてひとつきがたった頃、僕は病院で自律神経失調症と診断された。受験や家族や学校の周りの人間とのうまくいってないことによるストレスが原因だった。成績は高校生になって全然伸びなくなり、家族とは成績や進路のことで揉め、僕は周りの人と仲良くなるのが苦手だったから高校ではあまり友達ができず孤立していた。修学旅行には参加したが、みんな楽しみにしていた高校行事最大のイベントは、僕には楽しめなかった。

修学旅行も終わり、本格的な受験シーズン。僕の気持ちはどんどん弱くなっていった。授業に出ても全然わからない。頭痛と不眠は相変わらず治らない。周りの人はどんどん先へ進んでいるのに自分だけ取り残されているような感覚。僕のストレスや不安は日々積み重なっていった。

冬休みが終わった頃から以前にも増して人が怖くなり学校へいけなくなった。周りからは甘えているだとか仮病だとか言われて本当につらかった。みんなと同じように学校に行けない自分が嫌いで仕方なかった。毎晩、次の日は学校へ行こうと決意しても次の日の朝になると学校が怖くなり、トイレで吐き続けていた。日に日に自分が嫌いな気持ちは強くなり、自分を傷つけはじめた。

そんな生活がひとつき続いたころ、担任から電話が来た。「三浦、体調大丈夫か？」担任はとても心配してくれていた。「はい、明日は学校行きます。」僕はわざわざ電話までしてくれた先生に学校に行けないとは言えず、そう答えていた。

次の日、学校へ行った。授業を受ける。周囲からの視線が怖い、気分が悪くなり、教室を抜け出してはトイレで吐き、保健室へ逃げ込んでいた。結局その日はほとんどを保健室ですごした。

その次の日は、また学校へ行けなかった。その次の日も、その次も…

それからまた学校へ行けない日が続いた。担任から電話があり、このままでは3年生にあげれないといわれた。家族からすごく怒られた。みんな僕のつらさをわかってくれないと思った。

それでもなんとか1時間フルに授業を受けることは難しくても、半分ずつ授業に出席できるように努力した。みんなが春休みの間も課題をやり続け、なんとか高校3年生になれた。

3年生になり、新しいクラス。知らない人ばかりで怖かった。けれど、担任は2年生の時と同じ先生だった。授業は相変わらず半分だけ出て、保健室へ。学校も毎日行くのはつらくて、保健室登校の日が増えた。学年が上がっても全然よくならなかった。夏には、このまま休み続けると卒業が厳しいといわれた。大学受験のときに必要な書類は、欠席が多すぎて書けないといわれた。それでも大学受験がしたい。担任が高卒認定試験を勧めてくれた。この資格をとっても高校卒業の資格をあげられるわけではないけれど、大学受験をすることはできると教えてくれた。高卒認定試験は担任に数学を教えてもらい合格することができた。

初めての大学受験、第1志望校の結果は不合格。

あたりまえだった。授業に出てなかった僕が毎日一生懸命勉強している人たちに敵うはずがなかった。

卒業式、僕は出られなかった。卒業を認めてもらえなかった。

担任が毎日電話をくれた。諦めるなどいってくれた。みんなが卒業したあとも僕は補講と課題に取り組んだ。何回も諦めそうになった。何回も保健室で泣いた。それでも先生は見捨てないでくれた。

卒業式から1か月近くたった頃、なんとか補講と課題が終わり、卒業が認められた。生徒は僕ひとりだけ、校長室での卒業式。今までお世話になった先生方がみんな握手してくれた、僕のこれからを応援してくれた。

高校生活はつらかった、けれどこの卒業式は僕の中でとても暖かいものとして心に残っている。先生、ありがとうございます。頑張ります。